昭和54年８月１日（第３種郵便物承認）令和３年６月29日発行（毎週火曜日）　ＡＪＵ通巻第 14225 号

私たちは、自閉症という障害をもつ人たちが、彼らなりに社会の一員として自主自立をめざし、豊かな人生を生き抜くよう共に道を拓いていくことを目的としています。

ＡＪＵ
檜の里

令和３年６月29日 発行 ／ 第104号

発行人 ＡＪＵ
東海身体障害者団体定期刊行物協会
名古屋市中区丸之内３－６－43 みこころセンター4F

編　集 社会福祉法人 檜の里
〒510-1326　三重県三重郡菰野町杉谷 1573
電話（059）394 － 1595
編集責任者　山田　勉
購読料　１部 100 円
（会員の購読料は会費に含まれています）

# コロナ禍
# 一般企業で働く利用者
## ～しっかり挨拶・良い笑顔～

昼食は対面にならないように

現場でもソーシャルディスタンスを保って

帰路はのりあいタクシーで

## コロナ禍の一年を振り返って
## ― とこれから ―

社会福祉法人 檜の里　事務長　　**永 久 雅 晴**

新型コロナウイルス感染症（以下「当該感染症」）の発生以来、新年度を二回迎える事態になりました。

利用者には家庭帰省や外出等の行動規制をお願いしています。その結果、昨年春を最後に家庭帰省ができていない利用者も見えます。

また通所利用者には一時期公共交通機関の利用をご遠慮いただき、保護者の方に事業所まで送迎を毎日お願いするなど、利用者、保護者の方には心身ともにご負担をかける状況が続いています。

昨冬はインフルエンザ感染症とのダブル流行もなく、春先の三月下旬までの三重県における当該感染症の感染者はゼロもしくは一桁台の状況が続いていましたが、それ以降一気に感染が拡大し、県内でもクラスターが急増しました。

この五月時点で当該感染症の再拡大を受け、三回目の緊急事態宣言の期限延長に併せて愛知県が対象地域に追加されました。隣県の三重県には「まん延防止等重点措置」が適用され、当施設・事業所がある菰野町はその実施区域の一つになりました。

ここからは多くの法人・施設事業所も同様に対応されたように、一昨年度末から現在までにおける当法人の当該感染症予防その他の取り組みを、運営面から報告したいと思います。

当初は、当該感染症拡大の影響により、マスク、使い捨て手袋、手指消毒液等の保健衛生消耗品が品薄状態で入手が困難でした。国から医療機関や福祉施設に対する優先供給スキームが示され、昨年六月以降は必要な数量を確保できるようになりました。現在はマスク、使い捨て手袋も容易に入手できるようになりましたが、当該感染症発生以前と比べたら価格は高くなっています。

またマスク、使い捨て手袋は国からの無償配布がなされるようになり、併設のあさけ診療所は医師会を通じて配布を受ける機会が増えてきました。同様に民間団体からもご寄付があり、ありがたい次第です。

他方、新型コロナウイルス感染症緊急包括支援事業費補助金を活用して、前掲の保健衛生消耗品の他に、不織布ガウン、シューズカバー、キャップ、抗菌サンダル、保護メガネ等感染対策用品も備蓄するようにしました。

更に、集団生活している利用者の居住場所（食堂・リビング）には、感染症対策の一助として、イオンクラスターによる除菌脱臭装置を設置しました。

こうした対策とは別に、ＩＣＴ機器（タブレット端末機、ウェブカメラ、オンライン用ディスプレイテレビサウンド機器）を整備し、Ｚｏｏｍ等を使用した職員外部研修や他機関との会議等に（研修等旅費交通費の実績額は極端に少なくなりました）、また遠隔地の保護者と利用者との面会用に活用するなど、インターネットを通じた機器利用の頻度を増やしていきました。

また法人内では、人の密集を避けるため、全職員が一堂に会さないように、施設内四～五か所に分散の上、リアルタイムに職員会議を開催するなどの工夫を試してみました。オンラインを活用した手法の練度が上がれば、使い勝手と活用範囲は更に広がると思います。

昨秋と年明けに利用者二人が高熱を出しました。直近の外出外泊の行動歴はなく、他の感染症も含めた罹患の可能性は低いと思われましたが、念のためＰＣＲ検査を受け、結果は共に陰性でした。検査結果の判明までは当該利用者を隔離し、職員は感染対策用ガウン等を着衣する物々しい格好で対応していました。

【次ページへ】

# 二〇二一年度事業計画

自閉症総合援助センター　あさけ学園
施設長　近藤　裕彦

**○はじめに**

昨年度は、年間を通じて新型コロナウイルス感染症対策に明け暮れてきました。このため、特に外部と繋がる活動や取り組みはほぼ実施困難となり、中止や延期を余儀なくされています。また、この災害がもたらす影響は大きく、取り組み全体にわたり再検討が必要となりました。二〇二一年度は、コロナ後の新生活を組み立て直していく一年と位置づけます。

**○２０２１年度事業計画**

**一．自閉症総合援助センターとしての取り組み**

あさけ学園（生活介護・施設入所支援：定員四〇名、短期入所：四名）、ワークセンターひのき（生活介護：定員四〇名）、あさけホーム（グループホーム：二十二名）、三重県自閉症・発達障害支援センターあさけ、あさけ診療所（児童精神科・心療内科）を一体的に運用し、自閉症のある人たちへの総合的な支援を継続していきます。

(1)施設入所支援では、それぞれユニット化した十数名の小集団の居住環境を最大限に活用し、二十四時間を通じた個別的な生活支援プログラムに取り組む。

(2)ワークセンターひのきは、あさけ学園の日中活動部門と協同した労働・生産活動を軸とし、さらにそれ以外の創作的な活動や社会的な支援を組み込んでいく。

(3)あさけホームは、ワークセンターひのきと連携し、一般企業で働く人たちの就労支援を含めた、個別ニーズに対応可能な地域生活支援プログラムを展開する。

(4)三重県自閉症・発達障害支援センターあさけは、専門的な相談機関として地域の関係機関の後方支援や研修事業を行なうとともに、発達障害者地域支援マネージャーの有効な運用を進める。

さらに、短期入所等の施設機能の活用が有効な人たちについて、ケアシステム会議で他の関係部署と連携して取り組んでいく。

(5)あさけ診療所では、利用者の精神科医療を担当するともに、健康や安全面に関す管理・指導を行なう。

(6)利用者の高齢化やその予防、健康の増進に向けて、日中活動部門（職業支援課）と生活の場（施設入所支援、グループホーム、短期入所、家庭、その他）、地域活動・健康増進委員会、医務室、調理部門（栄養士）、外部の専門家等と連携した取り組みを進める。

(7)強度行動障害を示す人たちの支援について、療育的、構造的な環境の必要な利用者への集中的な取り組みや緊急時の短期入所の受け入れ、その後のフォローアップなどの機能を担うための整備を行なう。

**二．特定相談支援事業所あさけの取り組み**

(1)継続して、法人内の福祉サービス利用者に係る計画相談支援（サービス等利用計画の作成・モニタリング）を客観的に行なう。

(2)法人以外の在宅障害者の計画相談支援について取り組む。

(3)地域生活支援拠点事業の相談支援機能を担う検討・取り組みを行なう。

**三．二十四時間を通じた生活支援の取り組み**

(1)利用者のニーズやその変化に応じた日中活動と夜間の居住支援を相補的に行なうため、常に個々の支援の意味付けや形態などを検討し、有効な支援プログラムや居住環境を工夫する。

(2)自立への意欲や行動の促進をめざすため、生産活動に加えて、個々の利用者に即した日常生活や余暇、社会的活動などを促進していく。

これらを進めるうえで、特定相談支援事業所、サービス管理責任者、支援員、医務室、他の部署、家族や後見人、関係諸機関と常に連絡を取り合い、個々の利用者への総合的なサービス提供に向けた協力体制を整える。

(4)コロナ後に向け、新たな家族や地域住民、外部機関等との交流の方法を模索する。

(3)利用者の社会的自立や地域での安心した暮らしを保障するため、近隣の住民や公共機関と協力・連携し、必要に応じて地域へ出向く支援を行なう。その都度、新型コロナウイルス感染症予防のための対策を講じていく。

(4)協同して家庭生活機能の維持・向上をはかるとともに、ライフイベントや暮らしを支えていく支援、高齢化する利用者の将来を見据えた日中活動や生活の場の整備、地域資源の開発などを進める。

**四．地域生活者の現実的なトータル・ライフ・ケア・プログラムの取り組み**

(1)利用者の健康面の配慮や高齢化への備え、地域生活の保障、働くことを基本とした自立、社会的自立を促す取り組みなどについて、さまざまな暮らしのニーズの検討・協議を重ね、地域で生活する利用者の住まいの構想を組み立てる。

(2)さんらいずホームA隣接地の今後の整備に向けて、グループホーム全体の運営・支援体制の検討を継続する。

**五．職員研修・育成**

誰も経験したことも万全な予防対策もないコロナ禍の日常を常に見直しつつ、利用者の生活の質を高めていく手立て、療育、支援など、これまで積み重ねてきた実践を基に進めていきます。

(1)支援員・世話人は個々の研修計画書を作成し、主任・管理職等と相談しながら目標を達成するための取り組みを進めていく。

(2)主任・リーダーは、研修全体を通じて、進行中のそれぞれの取り組みが前進しているという実感をチーム内で共有できるようコーディネートしていく。

(3)利用者の状態の変化に応じて、行動上の問題を未然に防ぐためのアセスメントと柔軟かつ即時に対応できる支援体制を編成していく。

(4)健康増進、創作活動等のプログラムの開発、及びそれらを計画・実施できる支援者の養成を進める。

(5)定期的にケースカンファレンスを実施する。

(6)外部講師によるスーパービジョンで明確化した課題へ丁寧に取り組み、その成果を蓄積し、深めていく。

(7)権利擁護に関する職員研修の開催や、外部研修会へ積極的に参加し、利用者の人権を守る意識を高めていく。

**六．施設整備に向けた取り組み**

(1)ＬＰガスを利用した非常用発電機設置工事に向けた取り組み（停電対策）

(2)建物等整備計画の原案作成に向けた検討

(3)感染症、防災、防犯に関する設備・物品等の整備及び充実

【前ページから】

こうした経験を踏まえ、当該感染症発生時の対策が現実味を帯びてきたため、居住棟ごとに感染の程度に応じたゾーニング・区域分けを想定し、対処行動を検討しました。

併せて、食事提供の在り方、寝具の交換・洗浄、生活ゴミの処分・運搬などが課題となり、施設内で協議できない部分は関係業者、行政に確認を行いました。

そこで感じたことは、実際に起きてみないと具体的な話は進まないため、感染の初期段階における状況確認、判断、対外交渉が重要になると思われます。

さて、家庭帰省ができなくなった利用者については、保護者の方に近況を伝える写真やはがき・手紙などを送付する取り組みを適宜継続しています。

職員には、自身の行動履歴を含めた検温（一日二回）や体調の具合を毎日健康観察表に記載してもらっています。体調に異常があれば、出勤前に報告してもらい、医療機関への受診等の相談に応じています。

また、当該感染症に係る休暇制度新設に伴う就業関係規則の改定、職員等がＰＣＲ検査を受けて陰性だった場合の対応に係るガイドライン策定などを整備し、その他危機管理マニュアル等の見直しに着手しています。

法人運営においては、感染対策を講じて、理事会、評議員会を開催しています。

危機管理の心構えとして、ある映画のセリフから思うことは、楽観主義が現実に取って代わることがないよう、一年以上にわたる感染症予防対策に慣れてしまわないこと、「Ｗｉｔｈコロナ」されど、感染防止対策の堅実な実行こそが施設・事業所の運営・事業継続のみならず利用者の命と健康を守ることに係わると肝に銘じたいと思います。

当該感染症のワクチン接種がこれから始まる中、まだまだ先が見通せない状況ですが、全職員が一丸となって、今後も種々の感染予防対策を徹底して行い、直向きに業務をこなしていき、何としてもこの難局に抗い、渡り合いたいと思います。

## 保護者会・檜の里後援会の書面審査結果について

令和三年度保護者会・檜の里後援会総会の審議議案に代わる「書面審議結果」は、過半数以上のご賛同により承認いただきましたので、ご報告致します。

## 法人会計報告についてのお知らせ

令和三年六月十九日に開催の定時評議員会において二〇二〇年度事業報告並びに決算報告が承認されましたので、ここにご報告いたします。

報告書は、あさけ学園事務所で閲覧することができますので、ご希望の方はお申し出ください。

# 世界自閉症啓発デー ONLINE2021 ―輝く人・照らす人―

『二〇〇七年十二月の国連総会で毎年四月二日を「世界自閉症啓発デー」とすることが決議され、以来全世界の人々に自閉症を理解していただく取り組みがおこなわれています。

日本でも毎年四月に東京で「世界自閉症啓発デーシンポジウム」が開催されてきましたが、昨年は新型コロナウイルス感染症の蔓延のため中止となりました。

今年もコロナ禍のため、大勢の人が集まるシンポジウムは避け、いわゆるリモートで開催されました。主催団体がインターネットで動画を配信し、各自がそれを見て自閉症について理解するという形になりました。』

「今年は「ＯＮＬＩＮＥ２０２１―輝く人・照らす人―」のテーマで四月二日㈮より動画配信が行われました。動画のコンテンツは三部からなっています。

■コンテンツ①「友情で輝く・友情で照らす―ジュリアとエルモのストリートタイム―」

皆さんテレビでご存じの、セサミストリートの体験型オンライン読み聞かせ「ストリートタイム」です。今回の絵本は「ともだちひろば」で、セサミストリートの出てくる自閉症のジュリアとその友達の様子を描いた話です。声優の冨田泰代さんの巧みな読み聞かせが素晴らしいと思いました。

自閉症者のジュリアがトーカーを使って会話をしているのが印象に残りました。自閉症者が一人一人色々の特性があることを理解させる良い作品だと思いました。

■コンテンツ②「動画で輝く・動画で照らす―世田谷区の啓発動画ハッタツ凸凹あるあるのできるまで―」

世田谷区が企画した発達障害理解の動画「ハッタツ凸凹あるある」を紹介しています。

自閉症者が多様性を持っていることをコミカルに表現した動画です。

動画の企画を行った世田谷区、制作にあたった女優東ちづるが主催する「Get in touch」、助言を行った東京都自閉症協会がそれぞれ企画・制作の舞台裏や苦労話をしています。

■コンテンツ③「スポーツで輝く・スポーツで照らす―スポーツのちから―」

スポーツが自閉症の人達に力を与えていることがあります。そんな「スポーツのちから」を筑波大学の澤江先生へのインタビュー、北海道の児童発達支援・放課後デイサービス事業所ジュン・ハートの活動、スポーツを楽しんでいる本人や家族を紹介しています。

これらの動画は四月二日から配信されていますが、この機関紙が発行される六月でも配信されていると思いますので、是非ご覧いただきたいと思います。

パソコンでもスマホでも「世界自閉症啓発デー２０２１」で検索すれば出てくると思います。

（理事長　山田　勉）

## 支援と連帯の輪・和 ⑨②

# 利用者の健康問題 ㊶

あさけ診療所所長　小西眞行

前回のこのコラムでは、コロナ禍の終息を願いつつ筆をおきました。ところが、この五月には皆様ご承知のように第四波がより感染力の強い変異株の登場で勢いを増しています。

こんな中で、医療関係者として私は四月十九日に菰野厚生病院で第一回のワクチン接種を受けることが出来ました。三週間おいて、五月十日に第二回の接種の予定です。

免疫が付いたところで、月末からは菰野町の高齢者に接種する側に回ります。テレビ報道ではイスラエルや英国ではワクチン接種が早々と国民の半数に達し、すると感染者数がみるみる減少していくのがグラフで示されていました。コロナ対策の決め手はワクチン接種の様です。

これはインフルエンザワクチンを毎年二回接種して一先ず安心してきたのと同様です。日本でも一日も早く皆にワクチンがいきわたる様に急ぎたいものです。

利用者のＡさんは、ズボンなどの破衣が連日のように続いていますが、これはでばかり過ごしているうちに不満がたまってイライラし、運動不足で体重が増えるケースが少なくありませんでした。

改めて コロナ禍以前の普通の日常が、いかに心の安定や体の健康に必要だったかを思い知らされます。

面会が何時になっても出来ない不満の表れでしょう。恒例の旅行や行事も取りやめを余儀なくされ、各棟やグループホームには閉塞感が満ちています。

診療所でも、先の春休みは楽しい所にも行けず、家

この五月の連休は私も家にばかりいたので、なだいなだの小説「れとると」を久しぶりに読んでみました。杉原ユキというおませな十歳の少女の不登校の治療記録です。ずいぶん昔、あすなろ学園で不登校の治療を始めた頃に読み、患者への精神の治療は愛の行為であると確か書いてあったように思ったからです。

精神療法を始めると患者は治療者に（治療者も同様に患者に）ある感情を抱くようになる。その感情がほかならぬ愛であり、しかしその愛の化学反応はレトルト（＊）の中だけのものにしなければならない。そうしないとその治療は分別を欠くことになる。という内容です。（こんな説明では物語の面白さは一向伝わらないのでぜひご一読を。診療所の図書にあります。）

この物語を改めて読んでみて、精神分析流の精神療法に限らず、私達が学園の利用者と関わり信頼関係が生まれる場合も、そこにはささやかでも愛と呼べる行為があったからではなかろうか。連休のひまにこんな事を考えながら読了することが出来ました。

（＊レトルトとは理科室にある実験器具でガラスの球状の部分と曲がった首の部分からなり蒸留に用いる。「れとると」は角川文庫）

## メンバー紹介 ㊺

『世話人　岡本（おかもと）　祐子（ゆうこ）』

前職はリラクゼーション業に携わっていました。今はまだわからないことばかりですが、先輩方に学びながら利用者さん一人ひとりの個性にあった関わりを心がけたいです。

よろしくお願いいたします。

『支援員　鈴木（すずき）　聖香（せいか）』

昨年十一月より支援員として勤務させていただいております。

利用者さんと一緒に、仕事を頑張っています。

よろしくお願い致します。

『支援員　飯田（いいだ）　真好（まこ）』

二月より支援員として勤務させていただいております。まだまだ、分からないことばかりですが、利用者さんにとって【安心感】のある存在になれるように、頑張って行きたいと思います。

よろしくお願いいたします。

## 第十二回 三重県自閉症協会作品展

昨年度は新型コロナウイルス対策で中止となり、二年ぶりに津のリージョンプラザで開催された世界自閉症啓発デー特別企画「第十二回三重県自閉症協会作品展」に四月一日～四日まで、あさけ学園として参加しました。

あさけ学園から絵画教室で描かれた利用者の絵画や棟のみんなで作った壁画、日中活動で作った四季のパネルや十二支の干支、雛人形などさまざまな作品を鮮やかに展示する事が出来ました。

他の施設の展示では、ゴジラの本物そっくりな作品や、環境をテーマにした作品など『どうやって作ったの？』と思う程繊細な物も沢山ありました。例年とは違い、新しい作品が多く飾られていました。

日頃利用者さんが頑張って作っている作品が、学園外で他の人の目に触れてもらう機会がないので、このような場で、作品を披露出来る事を大変ありがたく思います。

（支援員　寺本慧里）

# 学園だより＊

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、昨年の春ごろから外の事業所にも影響が出はじめました。

製造業では休みが増えだし、生活介護で契約している人は、ワークセンターを利用したり、ホームのハウスキーピングをしたりして何とか過ごすことが出来ました。マスクの品切れで、手作りしてもらったマスクのお世話にもなりました。

夏には通常通り仕事に通えるようになりましたが、感染症対策をどうしていくか、常に課題でした。手洗い、うがい、手指消毒、三密を避ける、換気、帰宅したらすぐ入浴、室内でもマスク、朝夕の検温…段々と定着してきましたが、どれもまだ声掛けの必要な場面があります。

## 一般企業で働く利用者

公共交通機関を利用する人、高齢者の施設で働く人もいます。

うつらないようにするだけでなく、うつさないということも考えなくてはいけない、という話や、マスクを外したい時は我慢だけで良いのか、真夏にマスクを考え、人のいない所へ行ってマスクを外す、暑い時はマスクを外して自転車に乗るなど話し合ってきました。

職場も、特に食堂の様子が大きく変わりました。椅子を一つ空ける、アクリル板を立てる、時間をずらすなど工夫されています。

検温の報告が義務付けられたり、会食やカラオケなどの自粛を促す会社もあります。

不要不急の外出はしないなど、もう一年以上続いています。「コロナが終わったら…」と言って、収束までしのごうとしています。皆、こんなに踏ん張れるんだと見直しました。

また、感染症対策のおかげで、ほかの体調不良を起こさなかったとも言えるので、良い部分は定着していってほしいです。マスクはしていても、「しっかり挨拶、良い笑顔」を忘れず、毎日を過ごしていきたいと思います。

（支援員　三宅光子）

感染症対策グッズはいつも通勤かばんの中へ

## ごんにちは

今回は十数年前より、ワークセンターひのき及びあさけ学園に仕事を提供していただいている㈲フジジャパン代表取締役・藤巻重孝さんにお話を伺いました。

ワークセンターひのきで受注量が大幅に減ってきた時期に、仕事の提供をして頂いたのがフジジャパンでした。

多くの利用者に仕事を提供することが出来て大変助けられました。現在もコロナ禍で大変な時ですが、安定して仕事を提供して頂いています。

藤巻社長に福祉施設に仕事を提供するきっかけを伺いました。「当初は福祉施設への仕事の提供は全く想定していなかった。しかし、菰野町が仕事を探している時にある企業から紹介されたのがきっかけで福祉施設への仕事の提供を始めた。

正直、初めは安く仕事を提供できればいいという思いだったが、利用者の屈宅のない笑顔や真面目に作業に取り組む姿勢に感銘を受けたし、元気をもらうようになった。次第にWinWinの関係になればいいという考えに変わり、今では、提供する仕事の単価を上げて少しでも施設や利用者さんの役に立てればと思うし、社会貢献、地域へ還元を強く思うようなった」と話していただきました。

また、藤巻社長は、対面での人間関係を大事にしていて、作業のやり方や新しい仕事を提供して頂く時などは、社長自ら施設の現場まで足を運んで頂き、直接アドバイスをもらっています。

社長には、いつもスタッフや利用者に寄り添って頂き大変信頼しております。

今後のご発展をお祈りするとともに、利用者の支援も変わらずよろしくお願いします。

㈲フジジャパン
代表取締役　藤巻重孝（ふじまき しげたか）

## ご寄付ありがとうございました

紙面を借りて厚くお礼を申し上げます（敬称略）。

【物品】
▽㈲フジジャパン＝飲物類
▽太田旗店太田光則＝手提げバッグ50枚

## 令和三年度　後援会費納入のお願い

社会福祉法人檜の里後援会
会長　飯田　俊司

私たちは自閉症という障害を持つ人達が、彼らなりに社会の一員として自主自立を目指し、豊かな人生を生き抜くよう共に道を拓いて行くことを目的としています。

この趣旨に賛同して会員となってくださいました皆様方には、今年度も引き続き格別のご支援ご協力をよろしくお願い申上げます。

同封の郵便振込用紙に必要事項をご記入の上ご送金頂きたく存じます。

年会費
正会員　一口二万円以上
賛助会員　一口二千円
（何口でも結構です）

ご連絡先は「あさけ学園」
℡０５９―３９４―１５９５です。

なお、会員の皆様には、法人機関紙「檜の里」（年三回発行）を毎号お送りします。

追記
「みえ漁連の海藻類」のお問い合わせは
℡０５９―３５１―６８０６
松田までお願いします。

## ようこそ「あさけ」へ

職員の研修で日頃からお世話になっているスーパーバイザー佐々本康子先生に投稿いただきました。

最初の緊急事態宣言、移動制限によりリモート研修になりました。多少の戸惑いはあったものの、リモートは二つの変化をもたらしてくれました。

一つ目は、直接研修時、発言の少なかった職員の発言が増え始め、各棟に小さいながら変化が見えて来たこと。責任を持った発言は自信となり良い変化が産まれるのだと改めて感じました。

画面越しは緊張感を緩和するようです。もとに戻った時、発言できる職員が増えている事を期待しています。

二つ目は、職員の動きをビデオに撮って送って貰いました。これは大きな成果がありました。繰り返し見ることで、直接見ていた時よりも職員の僅かな動きまで良く見られることです。

これで、職員の研修の受け取り方がよく分かり、直接の時には見えなかった小さな変化や研修成果を見逃さずに済むという嬉しいメリットがありました。

今また三回目の緊急事態宣言が出て暫くリモート研修が続きますが、やはり直接研修に勝るものは無いですね。早い収束を願いつつ。

## 編集後記

新型コロナウイルス感染の猛威は止まるところを知らない状況です。コロナ禍の人々の生活も長期に渡り、心身ともに疲弊しています。

学園開設四十周年をこの困難の中で迎えようとは誰も想像できないことでした。

一日でも早いコロナ終息を願いつつ、私たちにできる感染予防対策を徹底し、狭められた人間関係の中でも励まし合い、この難局を乗り切っていきましょう。

今年度の編集委員は、支援員からは池田健一郎、保護者からは市川潮、渡辺昭二、伊藤貴宮子、米村ユカリで紙面を構成していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

（保護者　米村ユカリ）